

※上条とは付き合ってるけど葵が退職する前のお話です。

「なっちゃんおはよう!!」

「あう」

「では宜しく願います」

「はい、行ってらっしゃい」

普通の朝だった。欠席もなくみんな時間通りに登園して、保護者に行ってらっしゃいをして朝の会。けれどその日、規定の時間になってもなっちゃんの保護者は迎えに来なかった。

「遅いですね……どうしたのかな」

後輩保育士の丞が時計を見る。教室にはもうなっちゃんしかいない。しかし迎えが遅れる旨の連絡もなかったし、朝も何も言っていなかった。

最後の一人になることなんて殆どなかったなっちゃんも不安そうな顔をしていた。

「たすく先生、ちょっと願います」

「はい」

丞に一声掛けて教室を出る。園長は今日も本社に呼ばれているので一先ず園長に電話をすることにした。

「はい……そうなんです。はい、分かりました」

園長から保護者に電話をしてくれると言う。すぐに折り返すからそのまま待つように、との指示。

(どうしたんだろう……)

朝も不自然なところはなかったように思う。

(もしかして事故とか……)

考えられるのはそれしかない。でもなんだか嫌な予感がしていた。

ピピピ——

鳴り出した電話をすぐに取る。相手は園長だった。すぐに電話をくれたことにほっとする。

「葵です」

『携帯にも電話したけど繋がらなくて。会社に電話したら退職したと言われたから、今から僕が家を見に行ってくる』

「え……」

そんな。だって、今朝も普段と同じ時間で、今までと変わらずスーツを着ていた。

『残業にさせちゃってごめん。予定とかは大丈夫かな』

「はい、大丈夫です」

今日は週末。今夜は上条に迎えに来てもらってお泊まりの予定だったけれどそんなことは言っていられない。

「すみません、一本だけ電話をさせてください」

『もちろん。丞先生にも謝っておいてくれるかな。家は遠くないし、とにかく一度見に行つてすぐそっちない。』

に向かうから。そしたら帰っていいし』

「分かりました」

電話を終えて、そのまま急いで上条に電話を掛ける。上条もすぐに出てくれた。

『お疲れ様です』

「お疲れ様です。あの、すみません、今日なんですけど」

『はい。何かありましたか』

いつも通りの穏やかな声。でも少し強張っているように聞こえるのは何かを察知しているからだろうか。

「あの……園児のお迎えがなくて……今園長先生が家を見に行ってくれているのでこのまま残業になりそうですね。今夜どうなるか分からないので、今日はちょっと……」

『そうですか。分かりました。私もすぐそちらに向かいましょう』

「え、でも」

確かに上条は副社長だ。でも、経営規模を考えたらここなんてただの末端施設なのに。

『私が創った園ですから。それに心配ですし気になります。すぐに向かいます』

「ありがとうございます」

忙しいのに申し訳ない。それになっちゃんは今不安でたまらないというのに、上条に会えると思ったら嬉しく、そして何より心強く感じた。

「たすく先生」

「は？」

今ここには三人しかいない。なっちゃんを一人にするのは憚られたけれど、今はまだ事情をなっちゃんに聞かせるわけにはいかなかった。

教室の隅で積み木で遊ぶなっちゃんを見ながら小声で話す。

「連絡取れないみたい。職場も退職しているみたいで、今園長が家に向かっている。事情を知った副社長が今こっちに向かっているから」

「え……そんな……」

「少し残業になると思う。予定は大丈夫かな。とりあえず副社長が来たら僕と副社長で対応するから、たすく先生は帰って大丈夫」

「僕は大丈夫ですけど……あ、ちょっと電話だけしてきてもいいですか」

「うん。家の様子を見たら園長もこっちに来るから」

丞と別れ、急いでなっちゃんの隣に座る。

「なっちゃん。何作ってるの?」

「あ……」

きつと、頭の中は保護者のことでもいいだろう。でも優しい子だから気を遣わせないようにと遊んでいるふりをしているのだ。

「なっちゃん、積み木上手だね」

でもその気遣いに気付いていることを知られてはいけない。

「先生は積み木が上手じゃないから、なっちゃんを見るとすごいなって思うよ」

その言葉に偽りは無い。配色だとか重ね方だとか、何かセンスがあるのだ。

「そうだ、そろそろお腹が空いたかな。ミルク飲もうか」

丞が教室に入ってきたのを視界の端で捉えて声を出す。そのまま丞が消えたのはミルクを用意するためだろう。

(それでいい)

きつと今この状態で、なっちゃんと二人になるのは精神的にきついだろう。ミルクは飲ませてあげたいし、かと言って葵が作りに行くよりはいい。

「あ、そうだ。実はなっちゃんに助けてほしいことがあるんだ」

「うん」

この時間になってから初めてのまともな反応だった。

「あのね、今度絵本コーナーを少し変えてみようかと思うんだけど、どう並べたらいいと思う？」

サイズや配色。結局子供たちはぐしゃぐしゃに戻してしまうので意味がないようではあるのだけれど、たまに場所を変えてやると今まで興味のなかった絵本にも注目されたりするものなのだ。

「あう……」

助けてくれるのだろう。なっちゃんはハイハイで本棚に近付いた。

「あう……んー」

考えている。けれどそれも数瞬のことで、なっちゃんは次々本の位置を変えていった。

「あ、それ、いいの？」

今一番新しくて人気の絵本。それをなっちゃんは一番端に入れてしまった。

「うー」

そして古くてポロポロな本——ようするに人気のなくなってしまった本を真ん中の目立つところに入れていく。

「なっちゃん……」

きつとなっちゃんは絵本が寂しいと思っていると分かっているのだ。それは普段から葵も言っていること。

『新しい玩具が仲間入りしました。みんな仲良く順番に遊びましょう』

紹介するとすぐに玩具に子供は群がる。今まで遊んでいた玩具を投げ捨てる勢いで。でもいつだつてなっちゃんは新しいものではなく、投げ捨てられた方の玩具で遊んでいた。そんな優しい心を持っている子なのだ。

「あおい先生、副社長が来られました」

「あ、はい」

立ち上がると、入れ替わるように丞が座った。今はなっちゃんも絵本に集中しているし大丈夫だろうとその場を任せる。

「上条さん、すみません」

「いえ。ここに来る間に園長とも連絡を取りました。どうやら完全に逃げてしまったようです」

「そうですか……」

まさか子供を置いて逃げるなんて。夜逃げのようなものなのか、なっちゃんを捨てるためなのか――。

「あの、僕、今日なっちゃんをうちに……」

だってなっちゃんには行く場所がない。一人でホテルに泊まれるような子でもない。かと言って保育園には泊まれるようなものはない。

「あおい先生……」

だめだろうか。やはり職務逸脱と言われるだろうか。でも今のなっちゃんの気持ちを考えたら離れるなんてできない。

「……それならうちにしましょう。あおい先生もちろん一緒に。幸いうちには子育てセットもありますからね」

「上条さん！」

まさかそんな提案をしてくれるなんて思っていなかった。

「あおくんのはまた買い直すことにしますから、今夜だけ貸してあげてください」

「……上条さん……」

恥ずかしい。職場でそのことを持ち出されるなんて。でもきつと、そこは譲れないところ――線引きをしようとしてくれているところなのだ。

「いいですね？」

「……はー」

恥ずかしい。でも気遣いも嬉しかった。

「とりあえず連れて帰りましょう。園長にはこのまま電話をしておきます」

「分かりました。じゃあたすく先生も帰宅で……なっちゃんに声を掛けてきます」

「それから荷物をまとめてください。あと食事等普段の自宅での生活の様子が分かるといいいんですが」

「あ、それなら定期的に提出してもらっている書類があります」

その場で引き出しから書類を探し、上条に渡す。

「ありがとうございます。アレルギーなどはないですね」

「はい。今のところ園で出している一般的なものでは特にはないです」

とにかく急がないと――教室に戻ると本棚は見違えるほど綺麗に整えられていた。

「わ、すごい」

何て切り出そう――そう思っていたのに、そのまとまった本棚に思わず目を奪われてしまった。

「すごいですよね……大人顔負けって言うか……」

「うん……すごい……」

一応保育士になる上で片付けの基本などは勉強している。子供にとってやりやすい整理整頓の促し方とか、そういうものだ。でもそういうレベルのものではなかった。

「なっちゃん、すごいね！ 才能だなあ……」

「うん、僕もそう思うよなっちゃん」

感心してしまう。配色、サイズ。大人だとサイズやタイトルのあいいうえお順を意識する程度にしかないのだけれど、なっちゃんの美的センスで綺麗にまとめられていた。

ひとしきり二人でなつちゃんを褒めた後は大事なお話の時間だ。丞も遅くさせてしまっても申し訳ないけれど、週明けの仕事に問題が生じないように一緒に聞いておいてもらった方がいいだろうと判断した。

「なつちゃん、あのね」

なつちゃんは静かに葵を見上げた。その無垢な目に胸が締め付けられる。

「……あの、今日は先生と一緒に泊まりしよう！」

精一杯の笑顔。状況を察したらしい丞も笑顔でなつちゃんに言った。

「良かったね、なつちゃん。あ、でも他のお友達には内緒だよ」

それでもやはり、なつちゃんの表情は曇ってしまう。やはり保護者に何かあったのだと察してしまっているのだ。いや、でもそれくらい乳児でもない限り分かってしまうだろう。

「前にも来たことがあるんだけど、上条さんっていう人のところに一緒に泊まりに行こうね」

丞は葵と上条の関係については知らないはずだし、恐らく副社長としての立場で申し出たのだとでも思っているらしい。

「なつちゃん！ きつとすっこくいもの食べさせてもらえるとと思うよ」

「たすく先生っ」

きつと以前一緒にご馳走になった焼肉を思い出しているのだ。でもここにはすでに上条がいる。どうせ聞こえないし、聞こえたところで気分を害するほど心の狭い人ではないけれど、丞の印象を悪くもしたくなかった。

「ね、なつちゃん。今日だけ先生と一緒に泊まりしてね」

なつちゃんは小さく頷いた。

~~~~~

「さ、どうぞ」

「うん……」

新しいパパの家。広くて、あまり物がない。

(パパ……)

そう言えば前のパパの家は荷物がたくさんあったように思う。けれど最近は減っていったような気もする。生活するのに必要なものはあったから気付かなかったけれど、『ここに何かあったような気がする』と思うことが最近をよくあったような覚えがある。

(……捨てる準備だったんだ……)

何も気付かず、何も考えずにいた。なんて間抜けなのだろう。パパはちゃんと、計画的に、ナツを捨てる準備をしていたのだ。

「あ、ただいま、ね」

「ただいま……」

そういえば、保育園にお迎えにくる他の保護者が言っていた。「ただいま」とにこにこして。そして子供を抱きしめていた。

(されたことないけど……)

胸がツキンと痛んだ。どうしてだろう。だって、毎日みんなのを見てたのに、何も感じていなかった。なのにどうして今胸が痛くなるのだろうか。

「そう。帰ってきたらただいま。出掛けるときは行ってきます」

「ただいま」

「うん、おかえり」

「おかえり？」

また新しい言葉。

(あ……あおい先生が言ってた……)

おかえりなさい、と迎えに来たパパに言っていた。

「迎えるときはおかえり。行ってきますって言われたら行ってらっしゃい」

「うん……」

覚えられるだろうか。でもこれから新しいパパと住むのだから、ちゃんと覚えなくては。頑張らないと、また捨てられてしまう。

「大丈夫、ゆっくりでいいんだよ。お話が好きじゃなければいけないし」

と言うことは、話していいということか。

「……あの、パパは赤ちゃんが好き？」

「うん、好きだよ」

「なら、話さない」

好かれないと。ちゃんと。今度は捨てられないように。二回捨てられた。きっと、ダメな子だったからだ。だから捨てられた。今度はもう捨てられたくない。いいこになる。ちゃんといいこに。

「……ナツくん、ナツくんはもっと自由でいいんだよ。お互いまだ知らないことばかりだけど、もう家族だから」

「うん」

領いたものの、本当はよくわからない。家族ってどういうことなのだろう。

「……お風呂入るっか」

「うん」

「一人で入ったことある？」

「いつも」

だって、保育園にお迎えに来てくれたパパはまたいつもどこかに行ってしまったから。だから帰ったらおやつを食べて、お風呂に入って、保育園の準備をして、寝る。

「……そう。じゃあこれからは俺と一緒に入ろうね」

「うん」

嬉しいな、と思った。一緒に入ってくれる。寂しくない。目にシャンプーが入っても、一人で泣かなくていい。

「こっちだよ」と優しく手を引かれ、洗面所。新しいパパは服も脱がせてくれた。でもオムツを外したと

ころで手が止まる。

(新しいパパ?)

どうしたのだろうか。うんちが出ていたのだろうか。でも下を見ても足首に絡んだままのオムツは黄色く汚れているだけだ。

(おしっこ汚いから?)

やっぱりダメだったのだろうか。また捨てられるのかもしれない。

「っ……ナツくん、ナツくんおちんちんは？」

でも新しいパパは床に膝をついたまま上を向いてくれた。目が合う。ばちばちとしていた。

「ないよ」

「……どうしてないのかな」

「邪魔だからしゅじゅちゅ……しゅじゅ……」

なんと言ったつけ。聞けば分かるけれど、上手に言えない。

「手術、かな」

「うん」

それだ。よかった、分かってくれた。やっぱり優しい。

「……どうして邪魔だったの？」

新しいパパに持たれた足を上げる。引き抜かれるオムツ。新しいパパはそれを丸めて袋に入れた。汚いから自分でしろ、とは言われなかった。

「わかんない……でも思春期だからって言ってた」

「そう……痛くない？」

「痛い」

もうたたくさん前のことだ。けれどまだ痛む。ぶついたりすれば当然痛いし、でも何もしなくても痛いことがある。

「今も痛い？」

「雨の日とか痛い」

「そう……そうだね、痛いね……」

痛いのは新しいパパじゃないのに、どうして新しいパパが泣きそうな顔をするのだろうか。

「新しいパパ、痛いの？」

「え？」

「痛い？」

「……ううん、大丈夫。ごめん、寒いね」

新しいパパも服を脱いで、それからお風呂に入った。広くてピカピカ。ちょっと掃除が大変そうだけれど、一生懸命やらないと。

「さあ、座って」

洗い場の真ん中に置かれた椅子。座ると、目の前に新しいパパが膝をついた。

「ナツくん、ここ以外に手術したところある？」

「わかんない」

手術は寝ている間に終わっていた。だから、背中とか、見えないところは分からない。

「そう……頑張ったね」

「うん」

他に痛むところがないか確認され、特にないと言う手で優しく身体を洗ってくれた。ふわふわもこの泡が気持ちいい。

「ん……」

「くすぐりたい？」

「ううん、気持ちいい」

こんなに優しいお風呂なんて初めてだ。汚いと言われないように、いつもごしごしと力いっぱい洗っていた。

「よかった。もっともこもこになって泡で遊ぼうか」

新しいパパは泡をいっぱい作って身体にくっつけてくれた。丸めた手の上に泡をのせて「ソフトクリーム」と言われたときは何かよく分からなかったけれど、新しいパパがたくさん笑ってくれて、嬉しくて、一緒にいっぱい笑った。

「可愛いナツくん。あわあわ楽しいね」

「うん！」

こんなに楽しいお風呂は初めてだ。楽しい。ずっといたい。でも、泡は流されてしまった。

「今度泡風呂しよっか」

「あわぶろ？」

「そう。今お湯に入ってるでしょ。これをあわあわにするんだよ」

「もこもこのお風呂？」

「そう。で、泡風呂なら寒くないからたくさん遊びながら入れるよ」

「わー！」

それってすごく楽しそう。後ろから新しいパパに抱っこされた状態でお尻で跳ねるとお湯が揺れた。

「わっ！ ころ。危ないよ」

「ごめんなさい……」

怒られてしまった。もうお風呂でびよんびよんはしない、と心に刻む。

「ふふ、怒ってないよ。大丈夫。お風呂楽しいね」

「うん！」

なんだ、怒っていなかったのか。よかった。

※ ※ ※

まさか、ペニスがないとは思っていなかった。でも傷はすっかり治っていて手術からかなりの時間が経っていることはすぐに分かった。



本来ペニスがあるはずのそこにあっただのは、小さな穴一つ。そしてその下に陰囊がぶら下がっていた。けれどそこを恥じる様子も、見られて戸惑う様子も見られなかった。

「ねえナツくん」

「ん？」

「何歳の時に手術したかわかる？」

急なことだったので、枕は一つしかない。でも腕枕で抱きしめて眠ろうと真ん中から少し横に寄せながら問う。

「じゅう……たくさん前」

「そっか……」

勘のいいこだな、とは思うけれど、どうやら一般的な知識は持っていないようだ。これまでどんな生活をしてきたのかは少しずつ聞き出さなければならぬ。

「ねんねしながら少しお話ししようか」

「うん」

歯磨きはきちんとできていたと思う。けれど甘やかしてやりたくて仕上げ磨きをしてやって、それからベッド。ころんと寝転がるとナツも嬉しそうに擦り寄ってきた。

(可愛いな……)

素直な子だ。最初こそ怯えていたけれど、お風呂でたくさん笑ったからか懐いてくれたように思う。

「明日お休みだから、ちよつとだけお出掛けしよう」

「どい？」

病院、と言ってもいいのか悩む。けれど何も知らずに病院に連れていかれば怖いかもしれない。

「病院だよ。ナツくんが元気がどうか診てもらっただけだから、痛くもないし怖くもないよ」

「しゅじゅ、しゅちゅ……」

「手術？　しないよ」

「しない？」

「うん、しない。痛いことはしないから。ずっと一緒にいるしね。手を繋いでいようか」

「うん」

それならいい、と思ってくれたらしい。腕の中で頭が動く。もぞもぞ動くのが可愛いな、と柔らかい髪の毛の感触を楽しんでいるといつの間にかナツは眠りに落ちていた。

「陰茎の切断と、尿道括約筋、肛門括約筋の損傷手術をしているようです」

医師の言葉に耳を失った。

ナツは今、狭山という看護師に部屋の隅に設けられたキッズスペースで絵本を読んでもらっている。

「傷は……古いですか」

「かなり昔のようですね。縫合方法も現代的じゃない……恐らく年配の開医者が行った手術でしょう。しかし傷も完全に治って、もう皮膚もしっかりと出来上がっていますからこれ以上特にできることはありません

せん」

「そうですか……」

「……この手術により、ナツくんは自分で排泄のコントロールができない状態になっています。恐らく排泄している感覚は分かるのですが、それを止める術はありませんし、排泄物ができ次第垂れ流し状態です」

(……機能をダメにしてしまえばトイレトレーニングしない言い訳になるからか……くそが)

「もう、感覚を戻すことはできません。なので今後も一生オムツが必要になります」

「は？」

待てよ、と思った。

「……ということは寧ろはそのまま？」

「ええ、そのようですね。きちんと機能しています」

ということは、ナツの精子も男性ホルモンも正常に造られている状態だということだ。思春期以降、それは当然のように欲を持つし排出を求めるようになる。けれどペニスを切断されているので――。

「……苦しめるため……」

思いがそのまま口に出てしまった。ハツとし、急いで何か言わねばと頭を巡らせていると医師が頷いた。

「かな、と私も思いました」

つい出てしまった言葉だった。しかし医師も同じように考えたのだと思うと少しほっとする。

恐らくは、性知識を与えることすらしたくなかったのだろう。面倒臭かったのか、それとも性欲に苦しむ様子を見てストレスを発散していたのか。どちらにしても完全に虐待だった。

「……もう、取ってあげてしまった方が楽なんじゃないか……」

~~~~~

(……今日もうんちはなし、か)

最後に排便があったのは三日前。どうやらまた便秘になっているようだ。

「ナツくん、ヨーグルト食べたい？」

「うん」

果物の入った甘いヨーグルトをお皿に出して、スプーンで一匙ずつ食べさせる。

「美味しい？」

「うん」

「ナツくんはイチゴのヨーグルトが好きだね」

最初は色々な種類を買った。それこそプレーンから味付き、低脂肪、砂糖なし、加糖、カスピ海、飲むタイプ――けれどナツが一番気に入ったのはこのイチゴ入りのヨーグルトだった。

「美味しいね」

「うん」

にこにこしながら食べる様子が可愛い。どれだけでも食べさせてやりたくなくなってしまいが、あまり食べ

させると夕食を食べられなくなってしまう。

「ナツくん、ぼんぼん痛い？」

「うん」

「そう……」

やはり便秘なのだろう。でもこうして「痛い？」と訊かない限り、ナツは自ら体調不良を訴えてはくれない。苦しいこと、痛いこと、悲しいこと——そういうのは全部教えてほしいと言ってあるのだけれど、まだ難しいのだろう。

「よし、おしまい。ミルク飲む？」

「……うん」

やはり元気がない。まだ悪夢を引きずっているのだろうか。

「飲みたくなければ飲まなくていいんだよ」

「え……？」

「飲みたいてって思ったときに飲んだ方が美味しいでしょ。それにお腹いっぱいになると苦しいから」

「うん……」

やはり遠慮していたのか。言うことを聞かないといけないと思っていたのかもしれない。

「ふふ、じゃあベッドで絵本読むのとミルク飲むのとお絵かきするのではどれがいい？」

「あ……うー……」

可愛い。悩ましげな顔が可愛い。ずっと見ていたいと思う。悩ませるのは可哀想だけれど。

「絵本」

「じゃあベッド行こうか。あ、その前に……」

お尻に顔を近付くんくん匂いを嗅ぐ。尿も便もなさそうだ。

「よし、じゃあベッドに行こう。絵本は何にしようか」

先日凶鑑も届き、ナツは今生活の全てに興味深々だ。

「うー……」

また悩む。でも今度はナツ用の本棚の前。読みたい本がいっぱいあるのだろう。

「どれでもいいよ。三冊くらい持って行こうか」

「うん」

選んだのは海の凶鑑と、それから絵本二冊。そういえば以前イソギンチャクの絵を描いていたので、もしかしたら海の生物が好きなかもしれない。今度海中を撮った映画を見せてみよう。とにかく、何でもしてやりたかった。

「うあああっ！」

「ナツくん?!」

突然の悲鳴。見ているページはサメの紹介ページだった。まだ字は覚えられていないので、簡単な説明はしてあげていた。でもほとんど眺めるだけ。それでも怖かったのかもしれない。魚を食べている写真も載っていたから。

「怖かった？ 大丈夫だよ」

ここは海じゃないからサメは来ないよ、そう言ってもナツはプルプルと首を振った。

「ナツくん？」

目に浮かぶ涙。瞬きをした瞬間、一粒流れ落ちた。

「怖くないよ。一緒にいるよ。大丈夫」

まるでお化けのテレビを観た子供のような怯え方が可愛い。

「大丈夫、大丈夫だよ」

凶鑑を閉じて横に置き、それから何度も頭を撫でるがナツは泣くばかりだった。

「どうしたかな……抱っこしようか」

身体を起こして、テレビを観るときのように後ろから抱きしめた方がいいかもしれない——そう思い布団を除けた瞬間だった。

(ん？)

鼻を突いた悪臭。便だ、とすぐに分かった。

「うんち出たかな？ ちょっと見せてね」

あまりにも臭いが強すぎる。まさかと思いき身体を横に向けさせ背中を見ると、腰の部分からオムツ漏れをしているようだった。

「気付かなくてごめんね、気持ち悪かったね。お風呂行こうか」

ぐちゃぐちゃの泥状便。これはかなり不快だっただろう。すぐに気付けばよかった。

~~~~~

「……バ。」

「ん？」

「もつと」

「え……」

「もつと」

「あ、ああ……うん」

もう一度目元にキスを贈る。するとナツは嬉しそうに笑って、そして股間を押さえた。

「ナツくん？」

「むずむず……」

「っー」

目元へのキスが性欲に繋がったということだろうか。以前からミルキングはしていたけれど、それ以上の行為は一切していない。

「……むずむず治す？」

もし「うん」と言われたら。きつと止まれない。だってキスでむずむずするなんて。今までのむずむずはお風呂に入ってそこを洗っていたときとか寝起きとか、まあなんとなくそうなるも仕方ないと思え

るときばかりだったのだ。なのに、キスで性欲を訴えられるなんて。

「……パパあ、治して……むずむずやだあ」

甘えた声。真っ赤な目元。潤んだ瞳。

「……うん、治そう」

ごめん、と心の中で詫びた。

「あつ、あつ、パパっ、パパあつ」

何度も想像していた声だった。一瞬で下半身が熱を持つ。

「あつ、あつ」

オムツを脱がせ、バスタオルを敷いたベッドの上。仰向けで足を開いたナツの隣に寝転びペニスの切断面を撫でる。たったそれだけでナツは可愛らしく啼いた。

「あああつ、パパっ、パパっ！」

快感が怖いのだろう。感じながら、同時に恐怖を覚えている表情がたまらない。

「ナツくん……可愛い。怖くないよ。たくさん気持ち良くなるうね」

「やつ、怖いっ、パパっ、パパっ！」

怖い、嫌と言いながらナツは坂本の首筋に顔を埋め、けれど足を閉じようとはしなかった。

「可愛いナツくん……おちんちんがあつたところ気持ちいいね」

「やあつ、あつ」

ローションを塗り込めるようにクルクルと回す。それだけ。でもこれだけではやはり苦しそうだ。

「ナツくん、もうちよつと気持ち良くなってみようか」

「えっ、や、パパっ、こわいっ」

「じゃあおしまいにしようか」

「うー……」

悩んでいる。素直。可愛い。

「どうしようか」

「やだあ……」

「やめるのが嫌？」

「……うん」

あまりの可愛さに「はあ」と熱い息が漏れた。どうしてこう可愛いのだろう。

「うん、じゃあお尻に指を入れるね」

「ぐーするの？」

ぐーとは、ミルキングのことだ。ぐーつと精囊を押すからなのか「ミルキング」のぐーなのかは分からないが。

「ううん、違うよ。今日はぐーじゃないよ」

身体を起こし、スキンとローションを持ってナツの足元へ移動する。

「うん……」

「怖くないよ」

スキンを嵌めた指にローションを垂らし指を入れる。以前狭山にナツの本音を訊き出してもらってから、ナツは快便が続いていた。

「……この変かな……」

「あっ！ なにつ、あっ！」

「ここだ。前立腺って言うんだよ。ナツくんの気持ちいいところ」

約5万8千文字です。

エロらしいエロはありません。ストーリー重視。

ただ下痢だのなんだの出てきます。お世話。